Herman Melville の宗教的影響について（5）

―― Moby-Dick と Calvinism ――

岡　本　雅　夫

岡山理科大学教養部

（1991年9月30日　受理）

はじめに

本論は，本紀要第26号（B）に掲載された同題目のものに連続するもので，Moby-Dick に見出される Melville の宗教的影響や，その背景となる Calvinism を中心とする宗教的思潮などについて考察を進めるものである。

前回までに，Thomas Walter Herbert Jr. の Moby-Dick and Calvinism : Part Two ; IX Ahab Transfigured の p150の前半までを読み，Herbert が展開する Moby-Dick 論を要約し，Melville の宗教的影響について考察を進めてきた。今回は，IX Ahab Transfigured の章の残りの部分，X Ishmael Adrift, Conclusion を読み，T. W. Herbert Jr. の Moby-Dick and Calvinism の全体を通して論じられている Melville の宗教的影響についての考察を結ぶことにする．（T. W. Herbert Jr の'Moby-Dick and Calvinism'の和訳した部分に『…』を付け，同書中にある引用箇所には「…」を付している。〈…〉の小見出しは，内容要約の便宜によって筆者が付している。）

―――――― ○ ―――――― ○ ――――――

<Starbuck's moral collapse>

『カルビニズムの敬神（pietism）の伝統では，正確な教義を単に知的に同意することだけでは十分でなかったのである。信仰が持っている人間を変える力（tranforming power）を経験しないで，信仰を理性的に理解する人間は，'literal man'（文字上の人間）と呼ばれ，そんな人間が，精神的経験（Spiritual experience）をするように勵ます努力が払われたのである。教義は，そのような経験の外的表現と考えられていたからである。

知力は，第二義的な機能を持つに過ぎなかった。即ち，人間の真の生活は，その底を流れる精神的傾向（spiritual disposition）によって，その輪郭が明確にされるのであった。

神の恩寵（God's grace）の助けなしでは，人間の理性は，理性的道徳（rational morality）を維持することすらできないと教えられたのである。人間は，その本性の内部において，又その本性の外からも，悪魔的な邪悪さ（Satanic evil）に挑戦を受けるので，その徳目を持続させるには，神の支えが不可欠であると考えられたのである。

Melville は，Starbuck の道徳上の堕落（moral collapse）を分析するのに，この相対

する知力や精神力(conflicting spiritual vitalities)という図式を用いている。』[1]『Starbuckは，Ahabの目的がはっきりと口から出されると直ぐにその瀆神的意味を感知した。しかしその洞察によってAhabに効果的に抵抗するべく奮い立つことはなかった。Ahabの初め頃の熱弁（declamations）に沈黙させられて，Starbuckは自分の異例の服従（unwonted submission）を考え込むのである。

> "My soul is more than matched ; she's overmanned ; and by a madman ! Insufferable sting, that sanity should ground arms on such a field ! I think I see his impious end ; but feel that I must help him to it. Will I, nill I, the ineffable thing has tied me to him ; tows me with a cable I have no knife to cut" ("Dusk," p. 148).

> （俺の魂は，たった一人の狂人が相手でも敵にもならん。相手が多過ぎる。耐え難い痛さだ，正気がこんな狂人相手の戦いで降参するとは…彼奴の不敬な目的は目に見えていると思うが，それを果すのに力を貸してやらなければならない感じがする。いやがおうでも，何とも云えないものが俺を奴に結び付けてしまっている。それを切るナイフがないケーブルみたいなもので俺を引張って行く）

Ahabの狂乱が，仲間であるStarbuckの存在の深い所に触れ，そこにある不敬な探求（impious quest）に従う性質（disposition）を明るみにさらすのである。「しかし彼奴は，奥深く入り込み，俺の理性を吹っ飛ばしてしまった」("but he drilled deep down, and blasted all my reason out of me".）Ahabを止めるという仕事に自分は適していないことを知って，Starbuckはこの仕事が自分に強制されることはないだろうという可成りの可能性に希望を置くのである。「憎まれ者の鯨も泳ぐ円い海を持っている」("The hated whale has the round watery to swim in"）ことを思い起こして，Starbuckは，Ahabの抱く"天を侮る目的"(heaven-insulting purposes)を神は押しのけるかも知れない(God may wedge aside)という，もっともらしい結論に至るのである。

Starbuckの理性的徳目（rational virtue）の無力さは，問題が，Ahabの瀆神からその行動の現実的結果へと移る背景の中で再び強調される。

Ahabが船室で眠っているのを知って，Starbuckは，自らの道徳的板ばさみ（moral dilemma）について考えをめぐらす。Starbuckは，中心的な疑問を抱くのである。

> "shall this crazed old man be tamely suffered to drag a whole ship's company down to doom with him ? — Yes, it would make him the wilful murderer of thirty men and more, if this ship come to any deadly harm ; and come to deadly harm, my soul swears this ship will, if Ahab have his way."

> （この狂った老人に，乗組員が皆一緒に破滅へ引きずられていくことが，やすやすと許されているのだろうか。そうだ，この船がひどい災に会うとすれば，

三十人かそれ以上の人間がこの老人に故意に殺されることになるだろう。もしAhab が自分の思いのままにすれば，この船はきっとそうなると俺の魂は誓っている。）

Starbuck は，自分の理由付けでは，狂気の船長を止められないことを感じ取っている。しかし Ahab に対する精神的恐怖に度を失って，Ahab を閉じ込めることは不可能だろうと感じる。

"He would be more hideous than a caged tiger, then. I could not endure the sight ; could not possibly fly his howlings … inestimable reason would leave me on the long intolerable voyage."

（彼奴は，檻に入れられた虎よりも恐しい存在になるだろう。そんな光景には耐えられないだろう，彼奴の吠え声から逃れることはできないだろう…量り切れない程の理性も長い耐え難い航海の間中，俺から離れてしまうだろう。

Starbuck は自分の理由付けを続け，遂に微妙に均衡を保つ優柔不断の態度をとる，即ちAhab を殺すことは，神による干渉（divine intervention）と同類になるだろうということである。

"Is heaven a murderer when its lightning strikes a would-be murderer in his bed ? … And would I be a murderer, then, if —."

（その稲妻が人殺しをしようとする人間を直撃する時，天は人殺しなのであろうか。もしそうなら，俺が人殺しになってやろう…）

Ahab の頭に狙いをつけて，マスケット銃に弾をこめて立っている時，Sturbuck は，まるで自分の企てにどんなに僅かでも天の確認が与えられるのを待っているように，何とも言えない不安な気持ちで動揺する。

"Great God, where art thou ? Shall I ? shall I" (The Musket, p. 422)

（偉大なる神よ，何処に居られるのです。この私が手を下すべきでしょうか?）

しかし，その行為に対して，神からの起動力（divine impetus）は与えられない，そしてStarbuck は，引下るのである。』[2)]

『この重大な局面の後，Starbuck の黙従は次第に哀れなものになっていく。勇気ある正しい心構え（courageous right-mindedness）が，自ら命ずることを果し得ない，そして神による強化（devine reinforcement）を受けることもできなかったので，Starbuck は，Ahab の手の内にある哀れな道具になるのである。

鯨を見付けようとはやる余り，Ahab は，自ら籠に乗って高く吊り下げられ，自分を安全にくくりつけているロープをちゃんと見張るように Starbuck に命じる。

Melville は言う。「この男（Starbuck）を，Ahab が自分の見張りに選んだということは奇妙であった。こうでもしなければ信用できない男の手に，自分の全生命を屈託もなく預けているとは」（"It was strange that this was the very man he [Ahab] should select for his watchman ; freely giving his whole life into such an otherwise distrusted person's hands" "The Hat" p.440）Ahab は，Starbuck の精神的な勇気が衰えてしまって，信頼できる従順さを身につけたのを利用できると思うのである。』[3)]

『Ahab の狂気が，Starbuck の魂の一部である理性を覆す力を触発するように，Ahab の世界観は，Starbuck が認めることができない意味を持つ様々な現実に集中する。

Starbuck は，Pequod 号に究極的破局は訪れないであろうという敬虔な思いでの期待を抱くことができる。何故ならば，Starbuck は，その敬虔さで，捕鯨業が示す神の悪意の証拠を忘れるように力づけてくれる静穏な海の眺めに，確信を抱くからである。ある素晴らしい天気の良い日に，Starbuck は深い海を覗いて願望に満ちた信仰を率直に告白したい気持にさせられて呟く。

> "Tell me not of thy teeth-tiered sharks, and thy kidnapping cannibal ways. Let faith oust fact ; let fancy oust memory ; I look deep down and do believe" ("The Gilder," p. 406).
>
> （海よ！幾層にもなっている歯の鮫や，人をかどわかす食人者のやり方などを話して呉れるな。信仰で事実を追い払い，空想で記憶を追い払うのだ。俺は，深く見下して，信じるよ。）

Moby-Dick との最後の対決は，Starbuck の男らしさの荒廃(devastation of manliness)の仕上げをし，Starbuck を，信仰がそれから護ってきた恐しい現実といやでも闘わざるを得なくさせるのである。Moby-Dick との戦いの二日目に，Starbuck は自分の信仰深い希望は空しいものであったのかも知れないと思って叫ぶのである。

> "Great God ! but for one single instant show thyself" ("The Chase — Second Day," p. 459).
>
> （偉大なる神よ，一瞬でもその御姿を！）

Starbuck の狼狽は，Ahab の探求の暗い意味に対処できないことを表現している。Starbuck は，Ahab に対して，前兆（portents）を要約する狂気じみた抗議をするが，Ahab の途方もない怒り（comic rage）を確認することができるだけである。

> "In Jesus' name no more of this, that's worse than devil's madness. Two days chased ; twice stove to splinters ; thy very leg once more snatched from under thee ; thy evil shadow gone — all good angels mobbing thee with warnings : —what more wouldst thou have ? — Shall we keep chasing

this murderous fish till he swamps the last man? Shall we be dragged by him to the bottom of the sea? Shall we be towed by him to the infernal world? Oh, oh, — Impiety and blasphemy to hunt him more!" ("The Chase — Second Day," p. 459).

（イエスの名において，もうこれ以上は止めて下さい。悪魔の邪悪さよりもひどいものです。二日追跡し，二度もばらばらに砕かれ，あなたの足までもぎ取られたではありませんか。あなたを包む邪悪の影はもう見えません—善き天使たちがあなたの周りに集り警告しています—これ以上何をすることがありましょう。最後の一人が水中に引きずり込まれるまで，あの人殺しの鯨を追い駈け続けるのですか。あいつに海の底へ引きずり込まれるのですか。地獄の世界まで引きずられようというのですか。ああ！　これ以上あいつを追うのは神に対する不敬であり，冒瀆です。）

Ahab が，白鯨に二度までも船を砕かれ，自らの足をもぎ取られたことを，神の悪意(divine malice)のより一層の表示であると読み取っているのに反して，Starbuck は，これは神の慈悲深い警告であると読んでいる。そして Ahab の不死身の決断に困惑するのである。

Ahab の目的が様々に意味していることを理解できないので，Starbuck は，混乱した思いと恐れの気持ちで身体が云うことを聞かない。Starbuck は，Ahab の行動は，自分の行動とは全く異質な神を前提にしているのだという事実を漠然と理解しているだけである。

"God keep us, but already my bones feel damp within me, and from the inside wet my flesh. I misdoubt me that I disobey my God in obeying him!" ("The Chase — Third Day," p. 461).

（神はわれらをまだ掴まえていて下さるが，身体の骨がもう湿っている感じだ，そして肉を濡らしている。俺が Ahab に服従することで，俺の神に服従しないことになると思う。）

追跡での最後の出来事は，Ahab が神の悪意と復讐（divine malevolence and vengefulness）に対して持っている理念（vision）を証明している。怒りの鯨が Pequod 号を急襲する時，Starbuck が抱く絶望は，自分の信仰が裏切られてきた人間を示しているのである。

Ahab の目的を押しのけるどころか，神を顕示するいろいろな事柄(manifestions of the divine)は，人間の生命が，気紛れに破滅させられる破局をもたらしたように思われるのである。

"Is this the end of all my bursting prayers? all my life-long fidelities?" — ("The chase — Third Day," p. 467)

（これが俺の胸がはち切れんばかりの祈りの終りなのか。一生をかけての忠誠の結末なのか。）

Starbuck の願望に満ちた神への信仰は，単なる願望に過ぎないものになってしまった。彼はただ哀れにも，「女が気絶する発作で」（“in a woman's fainting fit”）死を迎えないように祈ることしかできない。

Melville は，Starbuck の勇気（valor）の破滅を描くのに軽蔑をこめているのではなくて，その様な不面目な光景を許す超越した存在（The Beyond）に対する激しい怒りをこめているのである。

Melville は，Ahab と Starbuck を対照させているが，それは，Ahab の持つ超自然的なエネルギーを圧倒する力を，神は誰にも与えないということを示唆するためである。しかし又明らかなことは，Starbuck の男らしさを吹っ飛ばした力は，主として Ahab 自身を通して，Starbuck に伝えられたことである。』[4)]

<Impediment of cosmic evil>

『Melville の Ahab の堕落についての大局的な説明は，ある類似的な型に従っている。そして Ahab が敵対しようとする広大な悪（cosmic evil）に Ahab が逆説的に連坐することを明らかにする。

Ahab の，人類が抱く正当な不満（legitimate grievances）の代弁者としての役割は，Ahab の神の不正義に対する抗議に道徳的重みを与えている。しかし，Ahab と仲間との関係についての分析を拡大するにつれて，Melville は，Ahab が，精神的洞察（spiritual insight）を得る，或いは道徳的眞理（moral truth）に達する根源として，不適格であることを明らかにする。

白鯨追跡の発端で，Ahab の指導的地位は，神による断罪という共通性を確立する。即ち Ahab は，神に見放された人類（reprobated mankind）のために，天に向って抗議するのである。

Ahab の個人的な傷つけられたという意識（personal sense of injury）や不正義（injustice）に対する攻撃は，人間対神（Man's case against God）の問題になるのである。

Ahab と乗組員は，Anacharsis Clootz によってフランス革命議会に引出された“人類の代表”にたとえられる。

> a “deputation from all the isles of the sea, and all the ends of the earth, accompanying Old Ahab in the Pequod to lay the world's grievances before that bar from which not very many of them ever come back” (“Knights and Squires,” p. 108).
>
> （あらゆる島々や地の果てから集り，年老いた Ahab の供をして Pequod 号に乗り組み，法廷で世界中の不公平を訴えに出たが，そこから多くの者は帰ってこなかった。）

Carlyle の“Heroes”や Emerson の“Representative man”の場合と同様に，Ahab

の個人的経験は，全体としての人間の意味に対する関心が，はっきりと目に見える一つの焦点として与えられているのである。Ahab の生涯は，神に断罪された魂という性格を帯びた人間のそれを具体的に表現している。Ahab が受けた傷（injury）は，人間が受けるに値しない全ての傷を象徴している。Ahab の激しい怒り（fuming exasperation）は，知的にも精神的にも深いものであるが，“Adam” 以来の全人類が感じてきた怒りと憎しみの全てを要約するものである。

Ahab と人間との関係の中のこの一面は，Moby-Dick との最初の戦いの日の後で，Ahab の挫折（collapse）を述べる時に明確に表現されている。

> “In an instant's compass, great hearts sometimes condense to one deep pang, the sum total of those shallow pains kindly diffused through feebler men's whole lives. And so, such hearts, though summary in each one suffering ; still, if the gods decree it, in their life-time aggregate a whole age of woe, wholly made up of instantaneous intensities ; for even in their pointless centres, those noble natures contain the entire circumferences of inferior souls” (“The Chace — First Day,” p. 451).
>
> （一瞬の間に，偉大な心は，弱い人間の全生涯にわたって優しく拡散されている浅い苦痛の総和を，一つの深い苦痛に凝縮することがある。そしてその様な心は，それぞれ一つの苦しみに要約されているが，もし神が命じるなら，瞬間的な強烈さで作り上げられた全時代の悲痛を，全生涯かけて統合する。というのは，方角のない中心においては，それらの気高い性質は，全周円の劣等な魂の全てを含むからである。）

Melville は，Ahab を神に断罪された人間（the reprobate）を代表する英雄（a hero）に仕立てて，そのような人物は，神に見放された人間（the reprobate）の大胆さを砕き，選ばれた人間（the elect）の心を勇気づけるものであるとされる正統派（orthodox）の教えを逆転しているのである。敬虔な教えを逆転する用語を使って，Stubb は，自分の手に与えられたカードを使ってゲームをやり抜こうという Ahab の決心を，暖かく称賛する。

> “And damn me, Ahab, but thou actest right ; live in the game, and diein it!” (“The Quadrant,” p. 413).
>
> （えい，Ahab 船長よ，あんたは間違ってはいないよ！勝負に生き，勝負に死ぬんだから！）

しかし Melville は， Ahab の英雄らしさの持つ道徳的価値を徐々に台なしにしていく Ahab と乗組員との関係のもつ様々な面を発展させる。

Ahab は，乗組員の英雄的な反応に全く頼ることはできないことを知っているので，彼等を自分の目的の中へとらえておくことを計画した。

"Granting that the White Whale fully incites the hearts of this my savage crew, and playing round their savageness even breeds a certain generous knight-errantism in them, still … they must also have food for their common, daily appetites." ("Surmises," p. 184)

（白鯨がこの俺の野蛮な乗組員共の心を完全にかき立て，連中の野蛮さをうまく利用することで，あの連中が気前のいい遍歴の騎士道精神を持つようになるとしても，……乗組員達は，普通の，日常的欲望を満足させる糧を与えてやらねばならん。）

Ahab は，「神の造り給うた人間（the manufactured man）の永遠の構造的条件は，けちな根性である」（"the parmanent constitutional condition of the manufactured man … is sordidness,"）ことを考えて，鯨を追い駆けるのは，利益を得るためであるように見せかけ続ける，そして，最後には給金を払う日がくるという約束で乗組員を欺す。Ahab は又，自分が「船を丸ごと強奪しているという答弁しようもない非難を受ける」（"open to the unanswerable charge of usurpation."）ということを認めまいとして，Ahab の船長として偉れている点となっている慣習を注意深く守り続ける。Ahab の個人的な復讐のために航海することによって，乗組員たちが「道徳的にも法律的にも免責されて，そうしたいと思い，そのことをやり遂げる能力があれば，船長に対してこれ以上の服従を拒否できる」（"with perfect impunity, both moral and legal, his crew if so disposed, and to that end competent, could refuse all further obedience to him."）状況を Ahab は創り出してしまったのである。そこで Ahab は，「気配りの利いた綿密な計算ずくの注意力を，乗組員を従わせることのできるあらゆる細い雰囲気の影響力に払う」のである（"heedful, closely caluculating attention to every minute atmospheric influence which it was possible for his crew to be subjected to" ("Surmises," p. 184).）

Ahab は，ある一つの行動を始めるが，それは Channing が「カルビニズムの神が，もし人間の行動の模範として作られているのなら，その神は人間を怪物（monster）に変えるであろう」[5] と主張した時に意味していたことである。

反抗（defiance）は，怪物めいた神（monster God）への正しい崇拝（right worship）であることを発見した時に，Ahab は乗組員を服従させるために，直ちに自分と神を同一視することを始める。乗組みの男達は，焔の舌が Ahab の銛の突起からちらちらと燃え上がる時に恐怖に打たれる。しかし Ahab は，「焔を吹いている銛を握り，先頭に立ってロープの端をゆるめる水夫は，必ず突きさしてやるぞと叫びながら」("snatching the burning harpoon .... [and] swearing to transfix with it the first sailor that but cast loose a rope's end.") 乗組員が船を帰そうとするのを止める。Ahab は，自分の息を吹きかけて，焔を消すことによって「最後の恐怖を吹き消す」("blow out the last fear") ことを得意そうに主張するが，それによって迷信的な恐れを乗組員の心にかき立てようとしているこ

とは全く明らかである。Ahab は，神が怒りを乗組員に知らせる時に，彼等が感じるのと同じ絶望的な恐怖心を乗組員が抱いて，自分に服従することを欲したのである。

> "At those last words of Ahab's many of the mariners did run from him in a terror of dismay" ("The Candles," p. 418).
>
> (Ahab のそんな最後の言葉を聞いて，多くの水夫達は，うろたえ恐れて，Ahab から逃げ出した。)

暴風が羅針盤の針を逆向きにしたので，男達が恐怖に打たれているのを知った時，Ahab は自分の専制 (tyranny) をしっかり固める機会を見出す。逆向きになった羅針盤も完全に航海には役立つのであるが，Ahab はこの機会をとらえて魔法使い (wizard) になろうとするのである。Ahab は部下達には分らない技術で新しい羅針盤の針を作り，意図する効果に適しい芝居気 (showmanship) を出して，部下達に，結果がどうであるかを見るように言う。「自分の目でよく見ろ！ Ahab が照準磁石を支配していないか！」("Look ye, for yourselves, if Ahab be not lord of the level loadstone!")

Melville は，Ahab が部下達を巧みに操ることと，それが示す部下達に対する侮蔑を強調して非難する。

Ahab の「侮蔑と勝利を示す燃えるような眼の中に，致命的になる誇りに満ちた Ahab が見えたのだ」("In his fiery eyes of scorn and triumph, you then saw Ahab in all his fatal pride" ("The Needle," p. 425).)

Ahab が，乗組員の心の中に最初目覚めさせていた騎士道精神は，追跡が頂点に近付いて行くにつれて，全く姿を消すのである：Ahab の目的は，

> "domineered above them so, that all their bodings, doubts, misgivings, fears, were fain to hide beneath their souls ....All humor, forced or natural, vanished" ("The Hat," pp. 437-438).
>
> (乗組員よりも高い所にそびえていたので，彼等の前兆，疑い，不安，恐怖などは，魂の陰に喜んで隠れてしまった。……全てのユーモアは，無理矢理のものであろうと自然のものであろうと消え去ったのである。)

"神の支配" (divine dominion) に対して，自分の個人的な完全さを維持しようとする Ahab の戦いは，自分以外の人間に対して，個人としてもつ意味を拒否することによって初めて，行い得るものであると思われるのである。

Ahab の心中深くにある不断の専制主義の下では，水夫達はほとんど人間ではないのである。

> "Alike, joy and sorrow, hope and fear, seemed ground to finest dust, and powdered, for the time, in the clamped mortar of Ahab's iron soul. Like

machines, they dumbly moved about the deck, ever conscious that the old man's despot eye was on them" (p. 438).

(同様に，喜びや悲しみ，希望や恐れは，Ahab の魂の締金を巻いた石臼で細かい粉に砕かれたようであった。機械のように彼等はおし黙って甲板の上を動き廻っていた，年老いた専制主の眼が自分達に注がれているのを意識しながら。)

Melville は，Ahab と Ahab が狙う獲物を，聖書で最も悪名高い Herd 王と結び付けることで，Ahab の道徳的退廃（moral deterioration）の描写を完成させる。

Moby-Dick との出会いの二，三日前に，もの凄い叫び声が夜聞えて来る。

"like half-articulated wailings of the ghosts of all Herod's murdered Innocents" ("The Life-Buoy," p. 428).

(ヘロデ王に殺された無実の罪の人達の幽霊の，半ば言葉のように聞える嘆き悲しむ声のように。)

その叫び声は，Moby-Dick に水平線の彼方へ引きずられて行った Rachel 号の乗組員の声であることがすぐに提示されている。Gardiner 船長は，自分の息子の一人が，行方不明になった船に乗組んでいた事を明かし，Ahab に捜索に助力して呉れるようにに頼む。

"Do to me as you would have me do to you in the like case. For you too have a boy, Captain Ahab."

(同じ事が起ったら，お前が俺にして貰いたいと思うことを俺にして呉れ。お前にも男の子は居るだろう，Ahab 船長。)

しかし Ahab はぶっきらぼうに拒否する。

"I will not do it. Even now I lose time. Good bye, good bye, God bless ye man, and may I forgive myself, but I must go" ("The Pequod Meets the Rachel," p. 435).

(ごめんだ。今でも時間を損しているんだ。さようならだ，あんたに神の恵みを！俺が自分を許すしかないが，行かなくてはならんのだ。)

Melville は，無実の罪の人間を殺した事件の聖書の話を補強することで，その章を結んでいる。

"She was Rachel, weeping for her children, because they were not" (p. 436).[6]

(彼女は Rachel であった。自分の子供達がいないが故に，泣いていたのである。)

この場面は，Ahab が復讐を望んでいるのは，人類に対して，神による不正義なことが行

われているのを同情の気持ちで知っているからではなくて，自分の個人的な怒りからであることを示している。

Melville は，Golden Rule[7]を破るものとして表現している Ahab の人間の品位の破棄を，Ahab が自らを赦そうとする瀆神的傲慢さと結び付けている。Melville は，読者に，Ahab の冷淡さ（callousness）を評価させようとしているのである。Ahab は，癒し切れない傷に対する個人的な復讐を続けるために，白鯨によって引き起された難儀を和らげる機会を拒否している。

かくして Ahab は，神の悪意（divine malice）の共犯者（an accomplice）になり，その神に反逆の崇拝（worship of defiance）を捧げるのである。

超越的在存の力（the powers beyond）の悪意（malevolence）の犠牲になっていると信じて，Ahab は，不当に受けた侮辱（undeserved injury）に対する賠償（satisfaction）を得ようとし始める。しかし，Ahab の探求は，皮肉にも彼が復讐しようとする悪(the evil)の拡大になるのである。Ahab は，全てを司る力（the presiding forces）の手に握られた道具になるのであって，それも自分自身の破滅をもたらす時だけでなく，乗組員を利用し，最後に破滅させる時においてもである。宇宙の悪（cosmic evil）をこの地上の世界に伝える手段が，復讐を求めて悪と格闘する人間の手に発見されるのである。

超越的な力（the powers beyond）が，真に悪意のあるものであれ，無関心なものであれ，いずれにしても象徴的侮辱（symbolic affront）の内面的過程は，その侮辱に相応しい象徴的復讐（symbolic revenge）が求められることによって，まるでその過程自体がもつ力の作用（dynamism）によるかの様に進行するのである。』[8]

漂流するイシュマエル（Ishmael Adrift）

T. W. Herbert は，この終章で，Ishmael を，精神の航海者（spiritual voyager）から漂流する Ishmal に移行している。Herbert は，Ahab を，神によって断罪され，神の悪意に反逆の崇拝を捧げ，執拗に復讐の航海を続け，遂には Pequod 号諸共に破滅する人間としたが，Moby-Dick の Epilogue で，Melville が "And I Only Am Escaped To Tell Thee"（Job 1 15-17）という神の使者達が，ヨブに様々な災難を知らせにやって来た時の言葉を使っていることに着目し，Ishmael が，Ahab と一緒に海底に沈まなかったのは，神の善を見出して救われたのではなくて，神の真理（divine Truth）が，人間の道徳の基準としては倒壊した悲劇を告げるために偶然生き残ったのである，とこの章を結んでいる。Herbert によれば，Ishmael は，その様な人間の悲劇を語るために，そして更に神の真理を求めて，苦悩と懐疑の果しない海を漂流することになるのである。

＜Prophetic consciousness＞

『Ahab とIshmael の間に展開される関係は，Melville の認識，即ち道徳的自我（moral

self）を維持し，それを導いて行くことができる神の真理（divine Truth）についての統一された観念（unitary vision）を得る方法はないという認識を読者に伝える働きをしている。

Melvilleは，Ishmaelの多くの瞑想の中にその特徴が示されている予言者的意識（prophetic consciousness）を養うことによって，人間の精神生活にとって，神の真理についての統一された観念の様な基盤を見出したいと望んで来たのである。

Ahabの白鯨追跡の意味が段々と暗くなって行くにつれて，Ishmael自身の探求は，神の至福（divine beatitude）を幾度か瞥見することによって，しばしば前途が明るくなるのである。事実，Ishmaelが宗教上の疑問で苦しむことは，Ishmaelの肯定的な願望が満されるという明るい見通しが受け入れられるように思われる様々な瞬間の，必須条件であると確認されるのである。

> "For, d'ye see, rainbows do not visit the clear air ; they only irradiate vapor. And so, through all the thick mists of the dim doubts in my mind, divine intuitions now and then shoot, enkindling my fog with a heavenly ray. And for this I thank God ; for all have doubts ; many deny ; but doubts or denials, few along with them, have intuitions. Doubts of all things earthly, and intuitions of some things heavenly ; this combination makes neither believer nor infidel, but makes a man who regards them both with equal eye" ("The Fountain," p. 314).

> （だっていいかい。虹は澄み切った空には出て来ない，虹は水蒸気を輝かせるだけである。それと同様に，俺の心にぼんやりとした疑惑の厚い霧を通じて神性の直観が貫いて，天国の光で心の霧を輝かすことが時折ある。俺が神に感謝するのはこの時だ。というのは，全ての人は疑いを抱く；多くの人は否定する。しかし疑うにしろ，否定するにしろ，そんな連中で直観を抱く者は殆んど居ない。地上の全てのものを疑い，天のいくつかのものに直観を抱く，この組合せがあれば，信心者も不信心者も作らずに，地上と天上の全ての両方を平等に眺める人間を作る。）

信心者も，不信心者も，提示された信仰に関する規範や既に規定された標準から自分達の立場を定めるのである。しかし宗教的な天分を持つ者の直観は，規定に先立つ疑惑や混乱の雲を明るく照らすのである。その直観は，人間の精神的構造を組み立てる原質との接触の直接性（immediacy）を示している。

Melvilleは，Ishmaelの苦悩は，数少い高貴な人間（a noble minority），真理を求めて徹底的に戦う人間が経験する原初的な精神的苦痛（primordial spiritual agony）であることを示唆している。捕鯨船での進行性の周期で生じる苦労は，人間の精神の歴史を反映している：我々には，Ishmaelが，幾つもの段階を通って行き，繰り返して，古くからの英雄主義を吟味し，人間としての理解を少しずつ増して行くのが見えるのである。

"For hardly have we mortals by long toilings extracted from this world's vast bulk its small but valuable sperm ; and then, with weary patience, cleansed ourselves from its defilements, and learned to live here in clean tabernacles of the soul ; hardly is this done, when — *There she blows !* — the ghost is spouted up, and away we sail to fight some other world, and go through young life's old routine again" ("Stowing Down and Clearing Up," p. 358).

（何となれば，我等死すべき者が，長い時間の労苦によって，この世の巨大な塊りからその小さくはあるが貴重な精液を抽き出し，気だるい辛抱で汚れを洗い落しこの清い魂の聖廟に住めるようになった途端に，—そら吹いたぞ—とくる。精霊も噴き出されて，我等は他の世界との戦いに船を進めて行く，そして又若い者の人生の古くからのしきたりを経験するのだ。）

Melville のこの予言者的意識についての観念 (vision) は，Ishmael の"Grand Armada" における経験を通して，その最も雄弁で確信に満ちた表現となって示される。

Pequod 号のボートが，巨大な円形を描いて逃げ出している多くの鯨の群れを扇形に展開して追い駆ける。Ishmael のボートは，鯨がひしめいている中心にでき上っている静穏な場所へ引き込まれる。下を見ると，「鯨に授乳する母親鯨と，大きな腹で間もなく母親になると思われる鯨が見える」("the nursing mother of the whales, and those that by their enormous girth seemed shortly to become mothers.") Ishmael は，乳を吸っている鯨や，まだ臍の緒のついた新生児の鯨を観察する。

"Some of the subtlest secrets of the seas seemed divulged to us in this enchanted pond. We saw young Leviathan amours in the deep" (Grand Armada pp. 325-326).

（海の捉え難い秘密の幾つかが，この魔法にかけられたような場所で明らかにされるように思えた。我々は，若いレビアタンが海の深部で愛の行為をするのが見えた。）

この中心にある静穏 (central calm) は，周囲ぐるりに流血の惨事と苦痛とが見え，深い所では巨大な鯨の養育が行なわれているが，創造的精神の象徴になっている。その創造的精神とは，全ての喜びや恐怖を包含し，下等な人間の魂を無力にする程の多様な豊さを持っているのである。

"And thus, though surrounded by circle upon circle of consternations and affrights, did these inscrutable creatures at the centre freely and fearlessly indulge in all peaceful concernments .... But even so, amid the tornadoed Atlantic of my being, do I myself still for ever centrally disport in mute calm ; and while ponderous planets of unwaning woe revolve round me, deep

down and deep inland there I still bathe me in eternal mildness of joy" (p. 326).

(かくして，幾重にも周りを狼狽と恐怖の環に囲まれていたが，この捉え難い生物達はその中心で自由に恐れも抱かず平和な関心事に耽っている。…しかし，そうであっても，わが人生の龍巻の荒れる大西洋上で，自分自身も，無音の静穏をいつまでもその中心にあって楽しんでいる。そしてわが周りを衰えることのない悲哀の重苦しい星が回るとも，内陸深い所で永遠の穏やかな喜びにひたるのだ)

Ishmael のこの敬虔な思いに満ちた性質の精神 (reverential spirituality) は，他の場所で，Ishmael の気質 (temper) の一面として示される宗教的慣習に対する侮蔑 (mockery of religious custom) と，全く調和するものである。Ishmael は，「この地上にある全てに対する疑い」("doubts of all things earthly") を抱くことによって，「天上のものに対する直観」("intuitions of something heavenly") を得ることができると主張するが，その主張は，同等に妥当な逆の主張を意味している。即ち，霊感を受けた精神の航海者(inspired spiritual voyager) は，吟味に堪えないような宗教的教えに与えられる権威を非難しなければならないという主張である。

Melville は，内容のない伝統に威嚇される人間を嘲笑するが，それを，皮をはがれた鯨が，捕鯨のことを何も知らぬ水夫達に浅瀬と間違えられてきたことによって説明する。

Hence "with trembling fingers is set down in the log — *shoals, rocks, and breakers hereabouts : beware !* And for years afterwards, perhaps, ships shun the place ; leaping over it as silly sheep leap over a vacuum, because their leader originally leaped there when a stick was held. There's your law of precedents ; there's your utility of traditions ; there's the story of your obstinate survival of old beliefs never bottomed on the earth, and now not even hovering in the air! There's orthodoxy!" ("The Funeral," p. 262)

(それ故，震える指で航海日誌に記される—浅瀬，岩，そして波浪この辺り，注意！そして何年もその後では，多分，船はこの場所を避ける。まるで，愚かな羊が，先頭に立つ奴が，元そこに杭があった時に跳んだから，何もない所でも跳ぶようなもんだ。そこに，お前が言う範例法がある。所謂，伝統の効用がある。そこに，地に根を下してもいないし，空を飛んでもいない古い信仰の頑固な生残りの話がある。そこに正統主義があるのだ。)』[9]

<Manichaean cleavage>

『しかしながら，Melville の恐れを知らぬ疑問は，問いかけそのものが失敗する問題に直面するのである。

人間の道徳的生活の基礎を神の真理(divine Truth)に置こうとする者は，神の領域(divine

realm）そのものの道徳的構造に関するいろいろな疑問に直面しなければならないのである。その様な倫理的妥当性（ethical validity）を要求することが，Ishmael の探求の本質的要素である。しかし，Ahab と，Ahab が抱く憎悪は，善なる神（the Good）を探求する努力は究極的な根拠に支えられているのかどうかという疑問が持つ単純化できない要点である。Ahab は，神を悪意を持つものと認識するだけでなく，超自然的と思われるエネルギーを手に入れることによって，自分が心に抱く神についての観念を確認するのである。もし，Mapple 神父の断固たる姿勢が，神聖にして正しい神を証言するとすれば，Ahab の“不屈の強情さ”は，神が怪物である（divine monster）ことを同等に証言するものである。もし，究極的現実が，何かマニ教的分裂によって，それ自体道徳的に首尾一貫しなければ，その究極的真実は，人間の道徳的生活の秩序づけに基盤を与えることはない。

Mapple 神父と Ahab は，共に Melville の信念を具体化する存在である。その信念は，人間の自我は，人間の生活を越えたところにも，又その内側にも存在する神を宇宙の中心とする真実（theocentric reality），即ち究極の真理の輪郭に合わせて規律づけられなければならないというものである。この Melville の探求の暗黙の規準は，道徳的完全さ（moral integrity）についての神を中心とする概念から，対照的な型として，Ahab と Mapple の二人を創り出していることに明白に示されている。しかしその様な道徳的完全さそれ自体は，個々の人間の魂が共有する最終の真理（the final Truth）が破砕して，共通点のない相対立するばらばらの真理になると，不可能になるのである。

Starbuck の性格の破壊は，正にその様な宇宙の支離滅裂（a cosmic discontinuity）を示唆している。即ち Starbuck の人間としての完全さ（integrity)は，その完全さを神の善（divine goodness）という図式の中へ定着させようとした時に，自分の認識から排除せざるを得なかった様々な現実によって，破壊されるということである。

Ahab の否定できない邪悪さは，もし人間の道徳的判断が宇宙の秩序の性格を反映するのであれば，その秩序を破るものである。しかし，Melville は，Ahab を非難する時に，超絶的な制裁に訴えることはしない。それどころか逆に，Ahab を使って，倫理的洞察が，宗教的真理に関する権威を帯びるかも知れないという考えを攻撃する。

Ahab の退廃を描くのは，道徳の形而上的規準を確認するのがその意図であると主張することは，Melville の探求の根本主義（radicalism）を見失うことになる。

Mattiessen が述べたように，Ahab の悲劇には，十分な道徳的に確認されるものは認められない。我々は，道徳的真理への回復という精神的浄化の瞬間を与えられないのである。この Ahab の道徳的真理への復帰が省かれていることは，Moby-Dick が，Ahab の探求の形而上的問題を解決するに十分な超絶的な道徳的秩序（transcendant moral economy）を確立していないという事実から結果として生じているのである。』[10)]

<Ishmael and Ahab>

『Ishmael が，Ahab の探求から離脱するのは，Ahab の抱く様々な疑問に答えられる比較的大まかな図式ができ上がったことを示すのではない。むしろ，Ahab の探求そのものが疑わしいという一層深い懐疑を反映しているのである。

搾油が，鯨油を燃やしながら行われている夜，Ishmael は，操舵についた自分の部署から下を見詰め，異様な光景の意味について推測する。

> "the rushing Pequod, freighted with savages, and laden with fire, and burning a corpse, and plunging into that blackness of darkness, seemed the material counterpart of her monomaniac commander's soul."
>
> （未開人を積み，火を燃やし，突進する Pequod 号，屍体を焼くこと，真暗い闇の中へ突進することは，この Pequod 号の船長の偏執的な魂を，化身させたもののように思えた。）

この様な想念が精神を捉えている時，Ishmael は，気付かない内に眠り，夢の中で見るような恐怖に駆られて目覚めると，舵柄が逆向きになって，Pequod 号が，今にも転覆しそうな危険にさらされて風の中へ泳ぎ込んでいるのを知る。Ishmael はこの間近に迫る危険を解釈して，火の凝視（fiery fixation）について警告する。

> "Look not too long in the face of the fire, O man! .... beleive not the artificial fire, when its redness makes all things look ghastly. To-morrow, in the natural sun, the skies will be bright .... the glorious, golden, glad sun, the only true lamp — all others but liars!" ("The Try-Works," p. 354).
>
> （火をいつまでも凝視してはいけない！人工の火が全てのものをぞっとするように見せる時には信用してはならん。明日は，自然の太陽の下で空は明るいだろう…壮麗で，黄金の喜ばしい太陽，唯一の燈明—他は全て嘘だ！）

Ishmael は明らかに Ahab に魅かれている気持ちについて言いながら，警告を発する。

> "Give not thyself up, then, to the fire, lest it invert thee, deaden thee ; as for the time it did me."
>
> （火に心を奪われてはいけない。火がお前を倒錯させ，死に追いやるといけないからだ。暫らくの間，俺がそうだったのだ。）

しかし，この Ahab の火と燃える探求を拒否するということは，輝かしい太陽が顕示する世界が人間の精神的願望（spiritual aspirations）を，快よく受入れてくれることを意味しているのではない。

> "Nevertheless the sun hides not .... all the millions of miles of deserts and

of griefs beneath the moon. The sun hides not the ocean, which is the dark side of this earth, and which is tow thirds of this earth. So, therefore, that mortal man who hath more of joy than sorrow in him, that mortal man cannot be true — not true, or undeveloped. With books the same. The truest of all men was the Man of Sorrows, and the truest of all books is Solomon's, and Ecclesiastes is the fine hammered steel of wore. 'All is vanity.' ALL" ("The Try-Works," pp. 354-355)

（それにも拘らず，太陽は，月の下に何百万マイルと拡がる砂漠や悲しみを隠しはしない。太陽は，この地球の暗い側で2/3を占める海を隠しはしない。だから，悲しみよりはより大いなる喜びを持つ死すべき人間は，そんな人間は真実である筈がない—，本当でないしまだそこまで発達してはいない。書物についても同じだ。あらゆる人間の中で最も真実な人間は悲しみの人間だ。そして，最も真実の書物はソロモンのそれだ。そして「伝道の書」こそ素晴しい鍛えられた悲しみの鋼だ。全ては虚栄だ，全ては。）

Ishmael は，Ahab と，Ahab の強情な確信を斥ける。それは，全てそのような確信(all such certainties) は虚しいという認識に達したからである。

もし，博愛 (benevolence) を神の属性であるとする，そして神が宇宙の中心であると信ずる者達 (theocetric believers) が，"悪の問題" ("problem of evil") で救いようのない苦境におかれるなら，悪意の神が存在するとする Ahab の古くからの信念は，それに対応する "善の問題" ("problem of good") によって分裂することになる。Ishmael の Ahab に対する懐疑的拒否 (skeptical rejection) は，Ishmael の豊かで率直な自然の美に対する敏感さから，或る程度は生じているのである。Ishmael と Ahab の精神の対照は，Ishmael が「海に対して陸地のような感情」(land-like feeling towards the sea) を抱くことがあることを明らかにする時，明白になる。

The long-drawn virgin vales ; the mild blue hill-sides ; as over these there steals the hush, the hum; you almost swear that play-wearied children lie sleeping in these solitudes, in some glad May-time, when the flowers of the woods are plucked. And all this mixes with your most mystic mood ; so that fact and fancy, half-way meeting, interpenetrate, and form one seamless whole.

Nor did such soothing scenes, however temporary, fail of at least as temporary an effect on on Ahab. But if these secret golden keys did seem to open in him his own secret golden treasuries, yet did his breath upon them prove but tarnishing ("The Gilder," pp. 405-406).

（長く連なる処女地の谷間，穏やかな青い丘の中腹，そこらに忍びよる静けさ，遠く聞える雑音；遊び疲れた子供達が眠っているのはこうしたひっそりとしたところで，森の花が摘まれる楽しい五月祭の頃であることは確かだと言うだろ

う。これら全てが神秘的な気分で混り合うので，事実と空想が，中途で出会いお互いに入り交り，縫い目のない全体を作り上げるのだ。

どんなに束の間のことであれ，こうした心なごませる眺めが，Ahab に少くとも同じ程に束の間の影響を与えないことはなかったのである。しかし，もしこれ等の黄金の鍵が，Ahab の心に秘めた黄金の財宝を開いて見せると思われたとしても，Ahab がそれらの光景に吐きかける息は，それらを汚すだけのものに過ぎないと判ったのである。）

かくして，Melville は，Ahab の偏執狂的な情熱（monomaniacal passion）は，真に美しいもの（a true loveliness）を汚すという認識を主張する。Ishmael は，宇宙を悪の領域であるとする考えを統一する Ahab の暗い恍惚とした情熱（dark ecstacies）に魅力を感じるにも拘らず，物事の全ては，恵み深いものであることが経験される心象（vision）を抱く時を持つことができるのである。

Moby-Dick の最後の段階に入っている時に，Melville は Hawthorne に書いた手紙の中で，恍惚とした意識の限界（the limitations of ecstatic consciousness）について，この問題についての扱い方を明らかにする用語で述べている。

ゲーテが，死すべき人間の苦悩は，「全てに生きる」（"Live in the all"）意志があれば，消去できると信じていたことを Melville は笑って，「花や森に感じられる生命の興奮（the tinglings of life）を感じなさい」というゲーテの忠告は，激しい歯痛には，殆んど魅力がないだろうということを指摘している。この冗談の内面的意味は，Ahab の性格に採られている。Ahab の性格によって，Melville は，鋭く長引いた苦しみは，それ自体が"全て"（all）についての想念（vision）を産み出し，そしてその想念は，いかなる超越的な喜びにも劣らず，強烈な瞬間には，有無を言わせない力を持っているものであることを示している。

この認識によって，Melville は，"全てに感じる"こと（all feeling）は，現実の本質についていかなる洞察も生み出しはしないという結論に至るのではなくて，部分的な洞察を生み出すに過ぎないと確信するのである。Melville は，「真理を混乱させるものは，人間が一時的な感情や意見を，普遍的に適用すべきであると主張することである」と主張している。（"What plays the mischief with the truth is that men will insist upon the universal application of a temporary feeling or opinion" (*Letters*, pp. 130-131).）

Melville がゲーテの格言を斥けるのは，それが世俗的な常識であるという理由からではなく，又，自分の恍惚とした意識を持つ力が弱かったからでもない。その様な神秘的な洞察が得られる瞬間を不断に喚起できるので，それらの瞬間の多様性の意味を考慮したのである。』[11)]

＜Acceptance of defeat＞

『Ishmael の事実と空想(fact and fancy)が一体化していると思われる黄金の瞬間(golden moment)は，Ishmael が求めて来た神を宇宙の中心とする真剣な想念ではなくて，真理は現実的であるが究極的なものではないという束の間の経験であると解される。Ishmael は，もの倦げに叫ぶ。「この祝福された静穏な時が続けばよいものを」。（"Would to God these blessed calms would last,"） Ishmael の黄金の瞬間は，光栄ある頂点（glorious culmination)に到達するのではなくて，終りのないように思える漂泊の航跡に沿ってその場所を占めすのである。

> "There is no steady unretracing progress in this life ; we do not advance through fixed gradations, and at the last one pause : — through infancy's unconscious spell, boyhood's thoughtless faith, adolescence' doubt (the common doom), then scepticism, then disbelief, resting at last in manhood's pondering repose of If. But once gone through, we trace the round again ; and are infants, boys, and men, and Ifs eternally. Where lies the final harbor, whence we unmoor no more? In what rapt ether sails the world, of which the weariest will never weary?" ("The Gilder," p. 406).

> （この世の中には，着実に後戻りするような進歩なんてないのだ。我々は定まった段階を通って進んだりはしない，— 幼児期の一続きの無意識の期間から，少年時代の無思慮な信仰，そして青年期の疑い(並の運命)，それから懐疑，不信と続いて最後には，成人して「もしも」ということを腰を据えて考え込むのだ。しかし一旦通り過ぎてしまうと，又最初から再び始めるのだ。幼児から少年へ，そして大人になり，永遠に「もしも」を考え込む，どこに二度ともやい綱をほどかない最後の港があるのだろうか。
> 　どんなに倦怠した人間でも決して倦きることのない世界は，どんなうっとりとしたエーテルの中を航海しているのだろうか。）

もし，道徳的洞察（moral insight）や，恍惚とした想念（ecstatic vision）の両者が，現実（reality）は究極的には首尾一貫したものではない，という結論に達するならば，宇宙の中心に神を置く一新された展望（rejuvenated theocentric vision）の探求には終りがないであろう，そしてその探求は，探求者がエネルギーを奪われる妄想の企てのように思われるのである。自分の魂を支えてくれる最後の港に着く代りに，探求者は自らの不首尾を認識するのである。Melville はこの諦めの行為を，神秘的な幻想のクライマックスとして皮肉をこめて称賛する。"A Squeeze of the Hand"の章で，Ishmael は鯨脳(whale sperm)を両手で処理していて，そのかぐわしい香りに心を奪われる。

> "I forgot all about our horrible oath ; in that inexpressible sperm, I washed my hands and my heart of it .... while bathing in that bath, I felt divinely free from all ill-will, or petulance, or malice, of any sort whatsoever" (p. 348)

（俺は，俺達の恐ろしい誓約のことは忘れた；あの何とも云い様のない鯨脳で俺の手や心を洗った。その中に手をすっかり浸している間は，全ての悪意，いや短気，いや敵意など何であれそれら全てから神の力で解き放たれると感じたのだ。）

Ishmael は，Queequeg との最初の場面で確立された，同性愛を思わせる主題をよみがえらせる仲間意識にかられて，誓約を忘れるのである。

Squeeze! Squeeze! squeeze! all the morning long ; I squeezed that sperm till I myself almost melted into it ; I squeezed that sperm till a strange sort of insanity came over me ; and I found myself unwittingly squeezing my co-laborers' hands in it, mistaking their hands for the gentle globules. Such an abounding, affectionate, friendly, loving feeling did this avocation beget ; that at last I was continually squeezing their hands, and looking up into their eyes sentimentally ; as much as to say .... Come ; let us all squeeze hands all round ; nay, let us all squeeze ourselves universally into the very milk and sperm of kindness. ("A Squeeze of the Hand," pp. 348-349).

（絞れ！絞れ！絞れ！午前中ずっとだ。俺は，その中に俺自身が溶け込む程に絞った。奇妙な狂気めいたものが襲ってくるまで絞った。そして思わず知らず鯨脳の中で仲間の手を絞っているのが分った。連中の手を優しい乳球と間違えて，こんなにも豊かで，情愛深い，愛のこもった気持をこの仕事は生み出したのだ。遂に俺は，連中の手を絞り続け，連中の眼を思い入れたっぷりにのぞきこんだ。――こう言わんばかりだった――さあ，皆の手を絞ろう，お互いを絞り合おう，皆が皆一緒に絞り合って親切の乳と鯨脳に浸ろうではないか。）

ここでの同性愛的仄めかしは，初めの頃の場合の様に，真理に到達しようとする Ishmael の孤独な努力が要求した，伝統に対する反抗を示すためにここに配置されているのではない。これらの同性愛的な仄めかしは，正統派がそのような悪魔的な行いは，人間の精神的盲目の現れであり徴候であると主張するにも拘らず，異様な経験（outlandish experience）が求められるものだという主張を明確にするに役立つものではない。それどころか，Melville は，敗北の受容（acceptance of defeat）を描くために，彼の精神的探求が徒労に帰することを認めるために，同性愛的主題を再び導入しているのである。

この場面は，探求の厳しい前線からの感傷的退却を描いているのである。

"Would that I could keep squeezing that sperm for ever!" "For now .... by many prolonged, repeated experiences, I have perceived that in all cases man must eventually lower, or at least shift, his conceit of attainable felicity ; not placing it anywhere in the intellect or the fancy ; but but in the wife, the heart, the bed, the table .... the country" ("A Squeeze of the Hand," p. 349).[3]

（この鯨脳をいつまでも絞り続けることができればいいのに！今は…沢山の長過ぎた，繰り返された経験で，俺が認識したのは，あらゆる場合に，人間は最後には，自分が幸福を手に握ることができるという思い込みを，低いものにするか少くとも変えるのだ，それを知力とか空想の中には置かないで，妻とか，心とか，ベッド，食卓…国家などに置くのだ。）』[12)]

＜Final Skepticism＞

『Ishmael は，その懐疑主義(skepticism)によって，再び伝統的な家庭の慰安(conventional domestic comforts) を冷笑的に受け入れるのであるが，それは，“知力或いは空想力 (the intellect or the fancy)” が，精神的に求めるものを満たしてくれるかも知れないという希望を放棄するからである。Ishmael は，探求に出発した最初の頃には，Bulkington の英雄主義を称賛していた：Bulkington は，安全，慰安，暖炉，夕食…我々死すべき者に対して親切な全てから逃げ出していた（who fled “safety, comfort, hearthstone, supper .... [and] all that's kind to our mortalities” （“The Lee Shore p. 97）自らの精神的苦闘の厳しい独自性を保つためにである。

しかし，Bulkington の断固たる決心を称賛する時でさえ，Melville は，その決心が徒労に終るかもしれないということを仄めかしていた：「恐ろしいことだ，この苦しみの全てはこんなにも空しいものか」（“Terrors of the terrible! is all this agony so vain?” (p. 98).”）.

今，仲間と共に鯨油を絞っている間の暖かい親しみに満ちた気分で，「全ての苦しみ，こんなにも空しいものか」という問いに対する肯定の答が受け入れられたのである。そして，残忍な半神（grim demigod）に約束されている神格化（apotheosis）が否認されるのである。エリファズ（Eliphaz）がヨブ（Job）を，神の真理（divine truth）を究明しようとしているとして非難する言葉（Job 4：13）を繰り返し，Melville は，そんな努力は全て空しいという自らの認識を述べている。

> “In thoughts of the visions of the night, I saw long rows of angels in paladise, each with his hands in a jar of spermaceti” (“A Squeeze of the Hand,” p. 349)
>
> （夜の闇に浮かぶ様々な幻しを思い浮かべると，俺には天国で天使が長い列を作ってそれぞれ両手を鯨脳の瓶に突込んでいるのが見えた。）

鯨脳を絞る仲間意識は，Ishmael の究極の懐疑主義を示す特徴として確認されているのではない。Ishmael は孤独な超絶的態度を再び取り，Ahab の中に見出す「狂気の悲しみ」（“woe that is madness”）から離れ，「悲しみの知恵」（“wisdom that is woe” “The Try-Works” p. 355）というソロモンの厳しさを信奉するのである。自分の努力によって，

天国を思わせる陽光に最終的な神格 (final apothesis) を与えることはできなかったけれども，Ishmael は偉大な問題 (mighty issues) と取組んできた魂の高尚さ (loftiness of soul) を主張する。

> "there is a Catskill eagle in some souls that can alike dive down into the blackest gorges, and soar out of them again and become invisible in the sunny spaces. And even if he for ever flies within the gorge, that gorge is in the mountains ; so that even in his lowest swoop the mountain eagle is still higher than other birds upon the plain, even though they soar" (p. 355)
>
> (或る人達の魂にはキャツキル山の鷲のようなものがいて，それは真暗な峡谷に急降下すると再びそこから飛び上り陽光輝く大空の中へ姿を見せなくなるのだ。たとえ峡谷の中を永久に飛んでいるとしても，そこは山の中だ。最も低く降下しても，山鷲は，平原にいる他の鳥が上昇してもそれらよりもはるかに高い所にいる。)

真理の探求者 (Truth seeker) は，その探求が失敗に終り，普通の人間が自分の方角を定めるための全ての宗教概念を呑み込む真暗い深淵に只一人残されたとしても，依然として英雄的である。』[13)]

<Teller of Catastroph>

『最後に， Ishmael は Pequod 号の只一人の生存者として，今は救命浮標になった，Queequeg が自分の彫青を刻んだ棺桶につかまって漂流する。

この彫青は，最初に Queequeg と会った時に，Ishmael をぞっとさせたものであるが，一種の秘密文字 (bieroglyph) であることが明かにされる：

> "a complete theory of the heavens and the earth, and a mystical treatise on the art of attaining truth" (Queequeg in his Coffin," p. 399).
>
> (天と地に関する完全な理論であり，真理に到達する技術に関する神秘的論文。)

しかし，誰も読むことができないものである。従って，

> "these mysteries were .... destined in the end to moulder away with the living parchment whereon they were inscribed, and so be unsolved to the last" (p. 399)
>
> (これらの秘密の文字は，刻みつけられている生命の通う羊皮紙と共に朽ち果て，最後まで解読されない運命であった。)

この複雑な表象は，その中に，Ishmael が経験した多くの異質な印象や事実から，整然とした模様を織りこむ事ができるかどうかを考えるいくつかの表象の一つである。

自由（freedom），運命（fate），偶然（chance）は，“Mat Maker.”（Chapt. 47）の中に，生命（life）と死（death）は，“A Bower in the Arsacides”（Chapt. 102）の中に織り込まれている。事実（fact）と空想（fancy）は，瞬間的によみがえる自信を覚える時に“一つの縫い目のない全体を作り上げる”（“from one seamless whole”）が，その自信は，人間の起源（man's paternity）の秘密は墓場に隠されている，即ち生命の根源は，その終焉と織り交ぜられている，という暗い結論に直ちに屈服してしまうのである。この生命と死が織り交ぜられている厚い織物は，Moby-Dick の冒頭の文から Ishmael の頭にこびりついている。Queequeg の解読不能の彫青は，彼の身体から，やがて救命浮標になる棺桶に移されるが，この深遠な経験の秘密の象徴として繰り返し複雑にされる。しかし，この彫青は，最後に，それ自体が持つ不測性（inscrutability）を伝える。Melville は，それが解読できないことを表象するために，故意に複雑にするのである。入念な模様が刻まれたもの言わぬ聖像（the elaborate mute icon）は，荒漠たる海原を Ishmael に漂流させるのに役立っているだけである。Ishmael が生き残るための手段となっているが，その意味は疑問のままである。

Ishmael の結びの言葉がもつ Moby-Dick のテーマとしての意味は，終章の題目：「我汝に告げんとて一人のがれて来たり」(“AND I ONLY AM ESCAPED TO TELL THEE”（“Epilogue,” p. 470)）によって与えられている。ヨブ（Job）の様々な疑問が和げられる結びの章から取り出す代りに，この Moby-Dick の主調（keynote）を，ヨブに災いの知らせを持って来た使い達の言葉を使っているのである。

Ishmael は，Ahab の勝ち誇る悪（triumphant evil）に打ち勝つ意気揚々たる善（triumphant good）の根拠を発見したが故に，「救われた」（“saved”）のではない。

Ishmael は，偶然に救われて，神の真理（divine Truth）が一つの道徳的規準（moral standard）としては，打ち壊わされた悲劇（catastrophe）を我々に告げるためにひとり逃れてきたのである。』[14)]

結び（Conclusion）

『Moby-Dick の結びは，我々が最初に Ishmael を見つけた立場へぐるりと一巡して，Ishmael を戻している。いつも変らぬ懐疑的で，親愛の情を持ち，気まぐれだが，苦労に鍛えられた，そして極めて賢明な Ishmael が，白鯨探求の気違いじみた騒動と栄光の全てを我々に語ってくれたのである。たとえ，Ishmael と Melville が，求める真理を発見できなかったとしても，Melville の独創的な仕事の大部分は，その精神的悲劇についての熟達した語り口にある。Melville の宗教的伝統についての扱い方が明らかになる時，明白になることは，Mobo-Dick は，全ての基本的に創造的な努力の中で，最も捕え所がない，重大な局面を我々に喚起するということである。Moby-Dick は，不確実性（uncertainty）がもたらす危機（crisis）を我々に伝えるのである。その危機にあっては，我々が熟知する概念

は，現実を表現するものとしては権威を失い，それが持つ一時的で限定された性格を明らかに示さざるを得ないのである。

Meliville の苦闘（struggle）についての表現は，何らの予定された目的（telos）に支配されてはいない。Melville の探求が何にも捕われていないことそのもの(the very openness)が，それに堂々たる壮麗さと悲しさ（august grandeur and sadness）を与えている。自信に満ちた新しい精神の方向を定める代りに，Melville は，太古の時代と同じ様にうねる大海原の屍衣（the shround of the sea）をそのまま我々に示すのである。それは永遠の神秘の姿であり，人間が考え出す意味の様々な構造に最終的に限界を定め，それによって人間の精神は取り組む材料を使い尽すことがないこと，そして測り知れない恐怖や豊かな生命と直接取り組む機会を失うことがないことを確約しているのである。

Ishmael が Ahab の探求を斥けるのは，それが本物の美や喜び（authentic beauty and joys）を正当に扱わないからである様に，Melville の究極の懐疑主義（final skepticism）は， Melville が経験の基本的な多数性（basic multiplicity）を意識していることによって我々に知らされるのである。

Melville が，“Hawthorne and His Mosses”の中で，「現代の作家が無能なのは，材料が少ないからではなくて，むしろ有り余る程だからである」（“it is not so much paucity, as superabundance of material that seems to incapaciate modern authors” (“Mosses,” p. 544),）と言った時，Melville は，真理（Truth）に関する統一された観念（unified vision）を得ようとする自分の努力が挫折する主な理由を予見したのである。Melville は，“A Bower in the Arsacides (chapt. 102)”の中で，未知の神秘（unknown mystery）とのその様な対決を提示している。

Melville は，生命を織り成す広大な構造（the vast fabric of life）の姿として，じゅうたんの様な地を這う蔦から，高い木の頂きのからみ合いに至るまでの豊かにして複雑な緑の密林を描く。この生命の構造を生み出す神は，カルビニズムの絶対的権力を持つ神同様に測り知ることのできない存在である。しかし，それは，その神が創造したものが退化（degeneracy of his creation）したからではない。むしろ逆に，人間の探求は，それを妨げる巨大な創造力である織機の音で，聾にされるのである。この絶え間なく草木が成長する只中に，鯨の骸骨が横たわっている。それは織神（weaver god）が生み出すものより複雑な現実を示唆する程，生きたツルやマキヒゲに飾られている。その骸骨やツルは，生命と死が入り交っている，より総括的な構造を成しているのである。

この宗教的神秘を喚起して，その様な神秘と，公式な監視人達が見張る生命を失った教義の組織との関係を定義する。Melville は，その鯨の骸骨は，その内部を探ろうとする努力を怒る一団の僧達によって神殿として管理されていたと述べる。Melville が率直にその骸骨の規模や意義についての見解をその僧達に尋ねると，僧達は，仲間内で混乱した口論を始め，Melville に勝手に探らせるのである。(“A Bower in the Arsacides” pp. 374-375)。

Melville の精神的勇気は，曖昧さ (ambiguity) に対して並外れた寛容を含んでいた。その寛容さは，真実に関する相対立する仄めかしや見込みを，それらが首尾一貫した型を構成するという様なことを主張しないで，維持することができる力である。

Melville の時代に一般に受け入れられていた宗教信仰の内部にある謎は，この謎はその構造の公式監視者の間に狂気じみた論争を促したものであったが，Melville がそれを厳密に調査して明らかにした意味が持つ当惑する程の豊かさによって，この Melville の知的活力は証明されるのである。

In the Conflict of Ages で，Edward Beecher は，改進派 (liberal) と正統派 (orthodox) の教義上の対立が，彼が26年前に認めていた板ばさみ（dilemma）に至ることを突きとめている，そして自分のノートブックに，緊張した，秘密めいた型式（a tense and cryptic paradigm）で次の様に打ち明けていた；「悪は存在する。そのことが神の悪意を証明するなら我々は途方に暮れる。さもなくば，部分的な存在を愛さなければならない。我々はその事を分析できないのである。」（"Evil exists. If it does prove malevolence in God we are lost, or else must love a partial being. We cannot analyse the thing.") Beecher は自分の問題を秘密にしていた。それに対する解決法を考え出した後でも，自分を襲った精神的な動揺を限られた親しい人達だけに打明けたのである。彼の沈黙の理由は複雑であった。しかしそれらの理由の中には，もしキリスト教の学者が，この基本的苦境 (fundamental quandary) の存在を認めるなら，宗教に関する知識の道徳的権威は危機に瀕するであろうという認識があったと思われる。Beecher の brother である Charlesは，この話を内側の人間として知っていた。そして後に，Edward (Beecher) がこのことを断言したら，「社会を混乱させ，分裂させるようになるかも知れない」("tend to unhinge and distract society,") とか，「邪悪で不純な者があざ笑い，神聖な人が傷つけられたと感じるかも知れない」("wicked and impure might scoff, and the holy feel hurt.）と不安に思っていたということを説明したのである。

Moby-Dick の中で，Melville は，Beecher の謎を徹底的に分析し，Beecher はその謎を懸命に避けようと望んだのだという結論に達した。

Beecher は，「部分的な存在」(a partial being) を甘んじて受け入れたくはなかったのである；Beecher は，キリスト教の教えが人間の宗教的衝動を起動させようと努力した時の，一神教的権威 (monotheistic authority) の存在を証明しようとしたのだ。Beecherは，首尾一貫した精神生活の基盤を形成し得る一種の統一された形而上的体系をはっきり示したかったのである。

対照的に，Melville の探求は，「真理は首尾一貫しないものである」("Truth is ever incoherent" Letters, p. 143）と言わざるを得なくさせてしまったのである。Melville は，白鯨を神聖が具体化されたものとして称賛したが，しかし至高の一元的神格の顕現（the manifestation of a supreme unitary Godhead）としてではなかった。Melville は，白鯨

の神性を帯びた卓越性は，人間の精神的認識が，唯一つの全てを包含する原則によって秩序づけられるものではなくて，洗練された多神主義（a sophisticated polytheism）を自由に発達させる時にはじめて認識されるであろうと断言したのである。

> If hereafter any highly cultured, poetical nation shall lure back to their birth-right, the merry May-day gods of old ; and livingly enthrone them again in the now egotistical sky ; on the now unhaunted hill ; then be sure, exalted to Jove's high seat, the great Sperm Whale shall lord it.
>
> "Champollion deciphered the wrinkled granite hieroglyphics. But there is no Champollion to decipher the Egypt of every man's and every being's face. Physiognomy, like every other human science, is but a passing fable. If then, Sir William Jones, who read in thirty languages, could not read the simplest peasant's face in its profounder and more subtle meanings, how may unlettered Ishmael hope to read the awful Chaldee of the Sperm Whale's brow? I but put that brow before you. Read it if you can." ("The Prairie," pp. 292-293).
>
> （もし今後，高度な文化を持つ詩情豊かな国民がその生得の権利，昔の陽気な五月祭の神に帰る気を起こし，今は只一の利己主義の天に，そして今は神々のいない丘に再びそれらの神々を祭る気になれば，エホバの高座に押し上げられて，あの巨大な抹香鯨が君臨することになるだろう。
>
> シャンポリオンは，あのしわだらけの花崗岩に刻まれた秘密文字を解読した。しかし，全ての人間や存在の顔のエヂプトを解読するシャンポリオンはいない。人相学は，他の全ての人間の科学の様に，束の間の寓話に過ぎない。もし，そうなら，三十の言葉が読めるウィリアム・ジョーンズ卿が，深い捉え難い意味に埋れた素朴な農夫の顔を読むことができないとすれば，どうして，無学の Ishmael が，あの抹香鯨の額の恐るべきカルデア語を読めると思えようか。その額をあんたの前に置くだけのことだ。できるなら読んでごらん。）

白鯨の神性を帯びた神秘をこの様に率直に喚起する場面は，Moby-Dick ではしばしば生じる。そしてそれらの喚起が，ヨブ記（Book of Job）のレビアタン（Leviathan）の提示と比べられる時，それらの喚起は，聖書の中の同じ場面が持つ道徳的意味を逆転させたものであることが明らかになる。神は，聖書の記述では，服従を要求し，それは，受入れられる，というのはヨブ（Job）が，神の権威を受け入れるからである。創造に関する言語を絶する驚異は，ヨブが完全に服従する唯一の支配者である創造主を提示する。

Melville は，その正体を測り難い鯨（inscrutable whale）を，道徳的権威の神格（a morally authoritative Godhead）を象徴する姿と解釈しているのではない。

Melville にとって，宗教的な現実という面での謎は，宗教的道徳においても同様な謎を意味するのである。Melville は，いかなる単一の神性の力も，ヨブがする様な服従を要求することはできないと言う主張を伝えるために，Ahab と Ishmael の提示を用意し，その

二人を通して，「利己主義的な天」(egotistical sky)つまり絶体的権力を持つ神を攻撃するのである。

我々は，最終的に，彼の時代の支配的な精神的エトスに対する反抗に，Melville が個人的に関与している点に返る。"Hawthorne and His Mosses" で，Melville は，Beecher の理由に似た理由で，自分の探求を抑止されていたことを明らかにしている。この中で Melville は，危険な啓示（dangerous revelations）を生み出す「現実の軸そのものについての究明」（"probings at the very axis of reality"）について語っている：「我々が，恐ろしい程真実に感じるからと言って，善良な人間がその正しい性格によって，それを口にしたり，仄めかしたりしても，殆んど狂気とされるような事」("things, which we feel to be so terrifically true, that it were all but madness for any good man, in his own proper character, to utter, or even hint of them" ("Mosses," pp. 541-542).）Melville は，Moby-Dick の中で，一神主義の体系（theocentric system）を解体した途端に，肉体的，精神的疲労以上の深刻な消耗を経験した。即ち，自らの想念の狂気（the madness of his visions）がその中では理に叶っていた高揚した意識から，伝統的な形式の思考が世間でも，又彼の人格においても依然として通用している日常の世界へ帰る方向を見失ったのである。恐るべき事実(terrific truths)から顔をそむける人間として，「自分の正しい性格」("his own proper character") を再び持つことが困難になったのである。しかし乍ら，Melville の狂気（madness）は，正気（sane）であった。つまり彼の宗教上の疑いは，正しい疑問として固定されていた，そしてその本能は健全であったのだ。時がたてば，伝統的な宗教的論議(traditional religious discourse）は，基本的には混乱した状態にあるという Melville の直観は証明されるであろう。しかし乍ら，当面の問は，自分の狂気は，単なる個人的迷錯(personal aberration) に過ぎないという不安を抑える保証（assurance）が必要であった。

狂気についての形而上的意味に関する入念な思考によって，Melville が，自分自身の精神の不安定（mental instabilities）が，手に負えなくなるのではないかという事を，本当に恐れていたという事実に注目すべきである。Charles Fenno Hoffman が精神病院に入れられた時，Melville は自分の不安を具体的に述べる言葉を使って意見を述べている。「この様に，自分の友人か知人が狂気になるということは，その狂気になった人達の中に自分の心を感じる全ての人には，全く痛切に感じられることだ。というのは，我々の中には同じ火を燃やす同じ燃料があるからだ。一時的であれ狂気とは何であるかを感じたことがない人は，ほんの少しの頭脳しか持っていない人だ。永久の狂気がどんな種類の感じであるかは，十分に想像がついて当然である。丁度，子供の時を思い出すことはできなくても，どういう感じであったかを想像できる様なものだ。狂気の時であれ，子供の時であれ，いずれの状態においても我々は運命を恐れることもなく，神々の様に無責任で奔放である。」（"This going mad of a friend or acquaintance comes straight home to every man who feels his soul in him, — which but few men do. For in all of us lodges the same fuel to

light the same fire. And he who has never felt, momentarily, what madness is has but a mouthful of brains. What sort of sensation permanent madness is may be very well imagined — just as we imagine how we felt when we were infants, tho' we can not recall it. In both conditions we are irresponsible & riot like gods without fear of fate" (*Letters*, p. 83).

道徳の基準は，神性の原理 (divine principles) に基いていなければならないという推定が Melville の思考に内在していた。それは， Melville が大人に成長する間に Melville を支配していた一神主義体系(theocentric system)による物事の理解の中心的主張であった。Moby-Dick の中で，一神主義的権威の崩壊を持ち出した後で，Melville は，自分の意識を秩序づける方法が何一つ残っていない不安を抱く他はなかったのである。

それ故に Melville は，Hawthorne から Moby-Dick についての手紙を貰った時に，相当に意気が上がったのである。というのは，その手紙は，Hawthorne が Moby-Dick を理解したということを，Melville に納得させたからである。

Melville は，Hawthorne の評価に宗教的な意味をつけ加えたのである。それが Melville の深い不安を和らげてくれたからである。しかし Melville は，この意味を説明するのは難しいと思った。Hawthorne への返事は，Hawthorne によって与えられた深い安緒を何とか心に受け入れようと努力する時に経験する意識の変化をたどっている。 Melvilleが，Hawthorne の手紙への自分の反応が持つ宗教的意味を表現する方法を懸命に努力すればする程，使用する言葉は結局は超現実的になり，馴じみ深い心象の鋳直しは殆んど悪夢めいたものになるのである。

Melville は Hawthorne に，手紙を貰った時に事情があって直ぐに返事を出せなかったので，手紙に対する最初の反応 (first response) を事実上表現できないと言う。「私の内においては，神の持つ寛大さ (divine magnanimities) が自発的に即座に生じるのです。あなたが摑まえることができる間に摑まえて下さい。世の中がぐるりと回転してもう半分の側がやって来ます。だから私は私が感じたことを今は書けません。しかし以前は，私は汎神論的な感情を抱いていました—あなたの心臓が私の助骨の中で，私のはあなたの中で，そして二つ共，神の助骨の中で脈打っているのです」("In me divine magnanimities are spontaneous and instantaneous — catch them while you can. The world goes round, and the other side comes up. So now I can't write what I felt. But I felt pantheistic then — your heart beat in my ribs and mine in yours, and both in God's" (*Letters*, p. 142).

Melville は，この Hawthorne に対して感じる最初の連帯意識の中で，直接的に一神主義の伝統 (Theocentric conventions) を引合に出している。Melville は，Hawthorne の Moby-Dick についての理解は，神に根ざしている共有の精神（と Melville は確信している）を明白に示すものであると言っているのである。

しかし，その汎神主義な瞬間 (that pantheistic moment) は，異教の神々の宴で酒に酔

って浮かれる様な多神主義的無道徳性（polytheistic amoralism）と Melville が断言する全く異質な面の意識に屈してしまっているのである。

狂気の無責性についての思索を思い起させる言葉を使って，Melville は Hawthorne に知らせる。「何とも口に出して言えない程の安心感が，今この瞬間に私の内に在ります。あなたが私の本を理解して下さったからです。私は邪悪な本（a wicked book）を書いてしまいました。そして羊のように無垢（spotless）な気持です。言葉では言えない程な社交的気分（ineffable socialities）が一杯です。ゆっくりと腰をおろして，あなたや古いローマの神殿の神々の全てと会食したい無持です。これは今まで感じたことのない気持です。希望も絶望も有りません。満足（content），それです。そして無責任（irresponsibility）…私は，偶然に生じた気持ではなくて，最も深い存在意識（my profoundest sense of being）について言っているのです。」

（"a sense of unspeakable security is in me this moment, on account of your having understood the book. I have written a wicked book, and feel spotless as the lamb. Ineffable socialities are in me. I would sit down and dine with you and all the gods in old Rome's Pantheon. It is a strange feeling — no hopefulness is in it, no despair. Content — that is it ; and irresponsibility .... I speak now of my profoundest sense of being, not of an incidental feeling" (*Letters*, p. 142).

ここには，神性な同朋感情（divine fellow-feeling）が基盤とするべき中心となる神はいないのである。つまり，この共同意識（commonality）に，究極的な一貫性（ultimate coherence）を与える最高の単位たる神（supreme Unit）がいないのである。

Melville がこの"今まで知らなかった感情"（strange feeling）に見出す静穏さにも拘らず，この一節が主として強調しているのは，内面的不安定（inner instabilities）であることは明らかである。Hawthorne の手紙が覚醒させた「神の寛大さ」（divine magnanimities）を肯定しながら，Melville は，それが意味する内容についての Melville の意識に生じている根本的変化（drastic shifts）を述べている。つまり，初めの方では，神格への相互の参加（mutual participation in the Godhead）であり，今は，ばらばらの神々が集う宴（a feast of separate divinities）である。

神々の宴（the banquet of the gods）は，Moby-Dick の中で，称賛されている特に多様な宗教的意識（the multiplicity of religious consciousness）と一致する一つの心象（image）を与えている。しかし，それは現在の精神状態を述べるものとしては，Melville を全くは満足させてはいないのである。Melville は更に進んで，三つ目の心象（image）を与える。その中では，神に関する現実（divine reality）は，最早一つの神に統一されてはいない（no longer unified into One），そして個々の神々（individual divinities）としても正確には表現できないのである。

Melville の最終的理解（final apprehension）は，多数性（plurality），つまり，Melville

自身やHawthorneのような偉大な芸術家が一員となるに値する自主的な神々(autonomous gods)の集合体というのではなくて,最も深く意識していたのは,断片的分裂(fragmentation)であった。

"Hawthorne, あなたの出自はどこです？どんな権利があって，この私の生命の瓶から呑むのですか？私がそれに唇を当てる時，──見て下さい，それは私のではなくてあなたのものです。私は神格が，晩餐の席でのパンのように細かく千切られ，そして我々はその一部であると感じるのです。それ故にこの限りない友愛の感情があるのです。」

("Whence come you Hawthorne? By what right do you drink from my flagon of life? And when I put it to my lips — lo, they are yours and not mine. I feel that the Godhead is broken up like the bread at the Supper, and that we are the pieces. Hence this infinite fraternity of feeling" (*Letters*, p. 142).

ここには，心理的な，そして宗教的混乱（psychic and religious dislocation）が，一緒に表現されている。晩餐のパンは，伝統的用語では，キリストの肉体を分ち合うことで，人間がその存在の神性な根源や基盤（the divine source knd of ground of men's being）を共有する機会を持つことを意味している。Melville のこの心象（image）の応用では，分ち合う人間が姿を消していて，神の千切られた断片である人間が後に残っているのである。Melville の精神的探求（spiritual investigation）が，全ての人格が基盤とする神（Godhead）を解体したように，Melvilleは，自らが，その一つの断片であることを経験したのである。同様に，共有する瓶が示す心象は，超現実的に Hawthorne の唇に変形した Melville のそれへの喚起によって，自分自身の人格の輪郭（the contours of his personality)が，どれ程あやふやで，いらいらする変容(indefinite and liable to unnerving transformations）を遂げ易いものであるかをどの程度知ったかを示している。

Melvilleがこの内面の可塑性（this internal plasticity）を Hawthorneに明らかにした時，Melvilleは，不安を覚えながら自分が何か奇妙なことを言っていると分ったのである。「親愛なる Hawthorne, 大気のような懐疑主義が，今私の中へこっそり入り込んでいます。そして，こんな風にあなたに手紙を書いている私が正気かどうかを疑問に思っています。しかしどうか私を信じて下さい。私は狂ってはいません。最も気高いフェストウスです。しかし，真理は常に支離滅裂です。そして，偉大な心がぶつかる時，その震動は，すごいものです。」

("My dear Hawthorne, the atmospheric skepticisms steal into me now, and make me doubtful of my sanity in writing you thus. But, believe me, I am not mad, most noble Festus! But truth is ever incoherent, and when the big hearts strike together the concussion is a little stunning" (*Letters*, pp. 142-143).

Melvilleは，自分の人格の変化は，自分の精神的探究（spiritual inquiries）と結び付いていることを知ったのである。Melvilleは，自分の中に発見した矛盾(incoherencies)は，

彼が認めるようになった究極的真理（ultimate Truth）の矛盾から生じていると主張したのである。神（Godhead）が解体されたという Melville の主張は，或る程度は，自分が成し遂げたことに対しての勝利の叫び（a cry of triumph）である。しかし乍ら，今 Melville を苦しめている不確実なこと（uncertainties）は，自分の知的発達を安心して判断することができない程に悲痛なものであった。

或る時には，自分が前向きな進歩（a positive advance）をしたと主張する；Melville は叫ぶ，「神よ，いつ我々は成長するのが終るのでしょうか。」（"Lord, when shall we be done growing?"）

しかし次の瞬間には，自分をどうしてよいか分らないと告白する；Hawthorne に，自分の手紙への返事は，"Herman Melville"と宛名されると誤配されるだろうと知らせる。「何故なら，このペンを導いている指は，正確には，以前にこのペンを取り上げ，この紙に書いた指と同じではないからです。神よ，いつ我々は変化を止めるのでしょうか。」（"For the very fingers that now guide this pen are not precisely the same that just took it up and put it on this paper. Lord, when shall we be done changing?" (*Letters*, p. 143).）Melville は，自分が適切な充足の方向へ"成長"（"growing"）していたのか，或いは，変化の方向を測る基準も無しに，或る状態の意識から別の状態のそれへと単に"変化"（"changing"）していたのか，いずれとも分らなくなってしまったのである。

Hawthorne へこの手紙を書いた時に，Melville の内へ入り込んできた「大気のような懐疑」（"atmospheric skepticisms"）は，今までの探求とは，又別の根源を持っていたのかもしれない。Melville は，Hawthorne が，自分を，そして自分の本を理解していると信じたが，それは Melville が，そう信じることを，激しく必要とし，欲してもいたからであった。

しかし Melville は又，Hawthorne は，自分自身が昂奮している"無限の友愛的感情"（"infinite fraternity of feeling"）を必ずしも共有していないということを用心深い気持で知っていたかもしれない。Hawthorne は，後に述べているように，Melville の宗教的問題についての桁はずれの思考（prodigious discourses upon religious subjects）を退屈だと最後には思ったのである。Hawthorne は，Melville が欲していた通りの魂の友（soul mate）では全くなかった。Melville は，Moby-Dick の中に，同時代の人間が共有しない，現実に対する彼の見解（an apprehension of reality）を表現したのである。一部の書評家や友人達は，Moby-Dick について賛辞や称賛の言葉を与えたが，読者達が，Melville が成し遂げたことの，息を呑むような偉大さを少しでも見るようになり始めたのは二十世紀もかなり経ってからであった。Melville には，誰しかける相手となる人間が居なかったのである。』[15)]

○ ○

T. W. Herbert : Moby-Dick and Calvinism を読んで，Melville の宗教的影響について

の考察を進めることが，本論の(1)～(5)までの目的であった。時間と，特に紙幅の都合で連載する形になった。本論の(1)～(2)は，同書の Part One について記述したが，そこでは，Melville の時代に権威を失いつつあった神学的権威カルビニズムをめぐる宗教的論争などを背景に，Melville の父親の悲劇的な死によって生じた家庭的苦境と，その周辺の状況の中での Melville の精神形成や宗教的影響が伝記的に記述されている。Leon Howard の Herman Melville や，Edwin Haviland Miller の Melville などの事実の厳密な考証による伝記と並んで，Herbert の Moby-Dick and Calvinism の Part one は，特に Melville の宗教的葛藤の展開を，Edward Beecher の Conflict of Ages, W. Ellery Channing の著作集，J. M. Mathews の The Bible and Men of Learning などを始めとして，当時のカルビニズム正統派と改進派の相対立する主張を挙げながら，詳述している点で着目すべきであると思う。本論の(3)～(5)は，Moby-Dick の展開に副って，Melville の精神的探求や宗教的葛藤が何であったかを記述しているが，ここでは，Herbert の Moby-Dick and Calvinism の Part II を，筆者の判断で小見出しを付け，各章の初めに，大体の要約を示し，Herbert の text は，そのまま日本語に直して記述している。

Moby-Dick に登場する二人の主役，Ishmael と Ahab について，Herbert は次の様に述べている。「Ishmael は，Hawthorne や Shakespeare の真理への洞察や，Calvinism がもたらす暗黒の力に触発されて，神を中心とする秩序の根源的真理に対して，これまでより一層の問いかけをしようとする一方で，Channing に代表される Unitarian の，理性を重んじる自由な信仰によって，直接真理へ到達できるという積極的希望を持とうとする熱意を抱き続ける Melville の語り手として登場する。」「Ahab の探求に，神と人間の道徳的関係についての，カルビニズ正統派と改進派の論争の核心に至る様々な意味を与え，怒れるカルビニズムの神が支配していると思われる世界の中での，人間の尊厳の運命を探るために Ahab を使うのである」

そして，Ahab は，遂にその探求の目標である神の悪意の共犯者になり，Pequod 号や乗組員諸共に破滅の底に沈むのであり，カルビニズム正統派の言う“神に見放されし者”の運命をたどる。一方，Ishmael は，神の真理が，人間の道徳の基準としては破壊している悲劇を告げるために偶然生き残るのである。そして茫漠たる大海原を，解明不能の模様が彫られた棺を浮きブイにして漂流するという，大気の様な懐疑に包まれた孤児の運命をたどる。

Moby-Dick には，複雑な修辞や秘密めいた模様が織り込まれていて，読み方によって様々な解釈が可能であることは，数多くの評論が明らかにしている。Melville の時代の宗教的伝統を背景とし，カルビニズム正統派と改進派の論争の主要点を対照させ，聖書についての言及を採り上げて，Moby-Dick の分析を行うという Herbert の方法は，キリスト教文化の歴史を背景として，実際に生活してきた人間にして初めて可能であり，この様な宗教的視点 religious perspectives を無視することは，むしろ Melville が意図する本筋から外

れて迷路に入り込むことになる様に思われる。

このMelvilleの宗教的葛藤や精神的探求を探る立場から，Melville最後の作品 Billy Budd を眺めると，又そこに一つの発見があると思われる。

引用文献

Moby-Dick and Calvinism, A World Dismantled by Thomas Walter Herbert Jr.
Rutgerts University Press New Brunswick New Jersey 1977
（同書中に引用されている作品）
Moby-Dick ed. Harrison Hayford and Hershel Parker New York 1976
1）Moby-Dick and Calvinism p. 150
2）ibid. pp. 150—151
3）ibid. pp. 151—152
4）ibid. pp. 152—153
5）ibid. p. 150 Footnote 13 Channing Works I，238
6）ibid.（Matthew 2：17—18）
7）ibid.（Mathew 7：12）
8）ibid. pp. 153—158
9）ibid. pp. 159—161
10）ibid. pp. 161—162
11）ibid. pp. 162—164
12）ibid. pp. 164—166
13）ibid. pp. 166—167
14）ibid. pp. 167—169
15）ibid. pp. 171—178

T. W. Herbert Jr. が Moby-Dick and Calvinism の中で引用している著作，
"Hawthorne and His Mosses," in Herman Melville, *Moby-Dick*, ed. Harrison Hayford and Hershel Parker (New York, 1967), pp. 535—551. Cited in the text as "Mosses."
The Letters of Herman Melville, ed. Merrell R. Davis and William H. Gilman (New Haven, 1960). Cited in the text as *Letters*.
Mardi and a Voyage Thither, ed. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle (Evanston, I ll., 1970).
Moby-Dick, ed. Harrison Hayford and Hershel Parker (New York, 1967). Citations give chapter titles as well as page numbers.
Pierre or, The Ambiguities, ed. with an introduction by Henry A. Murray (1949 ; reptd. New York, 1962). I cite the introduction to this edition.
Redburn, His First Voyage, ed. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle (Evanston, I ll., 1969).
White-Jacket or The World in a Man-of-War, ed. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle (Evanston, I ll., 1970).
同書中で引用している著作の省略記号。
ARC — Archives of the Reformed Dutch Church, Gardner Sage Library, New Brunswick Theological Seminary.
Gilman — William H. Gilman, *Melville's Early Life and Redburn* (New York. 1951).

GLC — Gansevoort-Lansing Collection, New York Public Library.
Leyda — Jay Leyda, *The Melville Log*, 2 vols. (New York, 1951).
Sealts — Merton M. Sealts, Jr., *Melville's Reading, a Checklist of Books Owned and Borrowed* (Madison, 1966).

On Religious Influences on Herman Melville (5)

Masao OKAMOTO
Faculty of Liberal Arts and Science
Okayama University of Science
1-1 Ridai-cho, Okayama 700 Japan
(Received September 30, 1991)

In this study as the final publication under the same title, the writer's purpose is an attemt to gain a comprehensive understanding of the religious influences articulated in the works of Herman Melville with focus on Moby-Dick.

In this paper, the writer traces the religious struggles as the mainstream of Moby-Dick which T. W. Herbert Jr. discussed in Moby-Dick and Calvinism, translating into Japanese from cover to cover.

The writer appreciates above all the detailed analysis of Moby-Dick in terms of the religious tradition in the United States in the nineteenth century, and such distinguishd religious insights given by T. W. Herbert Jr. seem almost impossible here in our culture of oriental divinities.